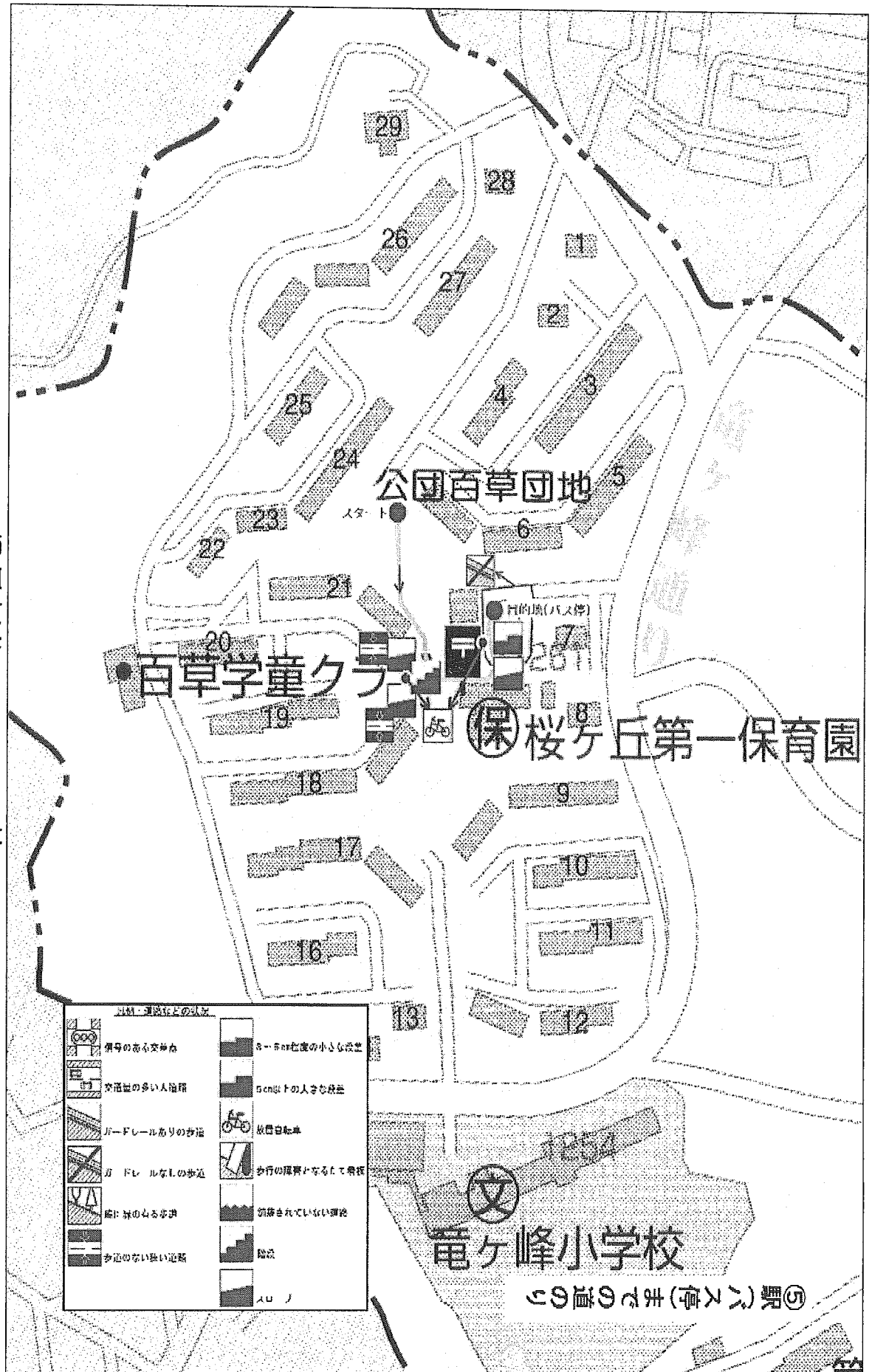


Appendix A-26 (百草団地)



Appendix B

こぶし団地 実地調査シート

調査日： __ 月 __ 日

天候： _____

調査者： _____

1. こぶし自治会館までの道のりの調査

- 調査時刻を記入してください。 _____

この調査では、こぶし団地のスタート地点からこぶし自治会館までの道のりの状況を把握し、高齢者が歩きやすい道のりかどうかを調べます。往路・復路とも同じ道順を通ってください。

- 調査開始時刻を記入してください _____

Q1-1. 往路：団地から目的地までの写真を1分毎に撮ってください。

その1： 写真係と地図係の2つの係にわかれます。

その2： それぞれの係は以下のことをします。

写真係 → 1分毎に立っている位置から右回り(つまり「正面」、「右」、「後ろ」、「左」)で各1枚ずつ写真を撮ってください(合計4枚)。次に、渡されたノートの撮影場所の番号(例：「撮影場所1」)を撮ってください。よって1分毎に合計5枚の写真を撮ります。ズームは使用しないでください。

地図係 → 写真を撮った位置に撮影場所の番号と正面の位置とが分かる記号を地図に記入してください。

例： 3番目(3分目)のデジカメ撮影場所

(こちらが正面)



地図に書いてある道からもしはぐれてしまったら？ → 1分毎の写真撮影を中断し、経路に戻ってください。経路に戻ってからまた写真撮影を開始してください。まよった部分の道の写真は消去してください。

Q1-2. 復路：目的地から表1にあるような道路や障害物の種類について調査します。道路の両端からおよそ5メートル以内の範囲にあったものを記入してください。

写真係 → 表1の道路等の状況が分かるように写真を各2～3枚とってください。

地図係 → 写真を撮った位置に表1の括弧のアルファベットを記入してください。

地図係記入例：写真係が撮った放置自転車が多い道路沿いの場所

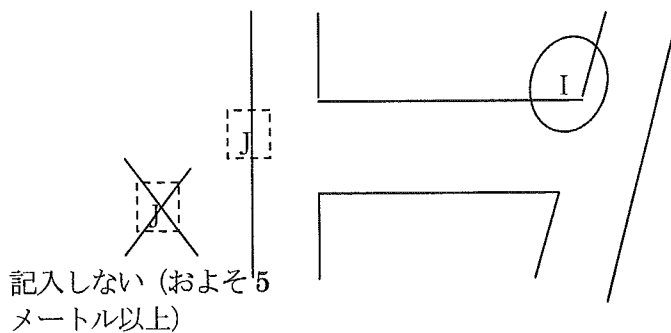


表 1 : 道路などの状況

信号のある交差点 (A)
交通量の多い大道路(B)
ガードレールありの歩道(C)
ガードレールなしの歩道(D)
緑道(E)
狭い道(F)
3~5 c m程度の小さな段差(G)
5 c m以上の大きな段差(H)
放置自転車(I)
歩行の障害となるたて看板(J)
舗装されていない道路(K)
段差(L)
スロープ(M)

3. 所沢航空公園までの道のり／公園入口付近／公園内の調査

注：2の病院までの最寄りのバス停までの道のり調査は、公園への行き方と同じため省略

この調査では、こぶし団地から所沢市航空記念公園までの道のりの状況を把握し、高齢者が歩きやすい道のりかどうかを調べます。往路・復路とも同じ道順を通ってください。

- 調査時刻を記入してください。 _____

Q3-1. 往路：団地から目的地までの写真を1分毎に撮ってください。

その1： 写真係と地図係の2つの係にわかれます。

その2： それぞれの係は以下のことをします。

写真係 → 1分毎に立っている位置から右回り(つまり「正面」、「右」、「後ろ」、「左」)で各1枚ずつ写真を撮ってください(合計4枚)。次に、渡されたノートの撮影場所の番号(例：「撮影場所1」)を撮ってください。よって1分毎に合計5枚の写真を撮ります。ズームは使用しないでください。

地図係 → 写真を撮った位置に撮影場所の番号と正面の位置と分かる記号を地図に記入してください。

例： 撮影場所が3番で上向きが正面の場合

(こちらが正面)



地図に書いてある道からもしはぐれてしまったら？ → 1分毎の写真撮影を中断し、経路に戻ってください。経路に戻ってからまた写真撮影を開始してください。まよった部分の道の写真は消去してください。

Q3-2. 次に公園の入口付近の調査をします。この調査では所沢航空記念公園の正面入口の状況、特に道路状況や入り口周辺などを調べます。まず(大)通りを渡って、公園入り口周辺に行くための横断歩道や歩道橋がありますか？ もしあったら：

写真係→ ズーム使用可で写真を各2～3枚撮る(公園入口も一緒に写るように)。

地図係→ 写真を撮った横断歩道や歩道橋の位置を地図に記入する。

Q3-3. 次に公園内を歩きます。入口からスタートして、主な公園全体の道(舗装されている経路)を歩きます。写真係と地図係は以下のことをします。

写真係 → 1分毎に立っている位置から右回り(つまり「正面」、「右」、「後ろ」、「左」)で各1枚ずつ写真を撮ってください(合計4枚)。次に、渡されたノートの撮影場所の番号(例：「公園場所1」)を撮ってください。よって、1分おきに合計5枚の写真を撮ります。ズームは使用しないでください。

地図係→ 公園内で歩いた道を地図に記入してください。

Q3-4. 公園の中を調査している間、高齢者(60歳以上くらい)がどれくらいいましたか？ 大体()人

4. こぶし団地の近隣エリアの調査

この調査では、こぶし団地の近隣がどのような環境・状況なのかを調べます。

調査時刻を記入してください。 _____

地図に指定されているエリア内のすべてを歩きます。スタート地点は地図に示されたように団地のほぼ中心地点です。写真係と地図係は次のようなことをしてください。時間をはかる必要はありません。

Q4-1 :

地図係→ エリア内にあるこの付近の団地の形態は下のいずれですか？ 含まれるもの全てに○をつけてください。また、それらについて→の質問に○をつけてください。

写真係→ それぞれのタイプの住宅の写真を撮影してください。

戸建て住宅

→入口段差（有り、無し、スロープあり）／階段手すり（有り、無し）

階段室型集合住宅（5階以下）

→入口段差（有り、無し、スロープあり）／階段手すり（有り、無し）／エレベータ（有り、無し）

片廊下型集合住宅（5階以下）

→入口段差（有り、無し、スロープあり）／階段手すり（有り、無し）／エレベータ（有り、無し）

高層集合住宅（6階以上）

→入口段差（有り、無し、スロープあり）／階段手すり（有り、無し）

Q4-2 : 次に地図に指定されたように、エリアの外側(周辺)に表Aのものがあるかどうか調べます。もしあったら、写真係は写真を撮り、地図係はあった場所に表Aのカッコの記号を書いてください。

写真係 → 建物や場所の正面や側面、周囲の状況がわかるように写真を撮るを各2~5枚程度撮ってください。必要に応じてズームなどを使用してください。

地図係 → 写真を撮った場所に印をつけてください。

表A

<u>商業・福祉関係</u>	<u>その他</u>
喫茶店 (キ)	町内情報の掲示板 (情)
食堂 (食)	公衆便所 (便)
商店街 (商)	空き地やグラウンドや
コンビニ (コ)	小さな広場 (空)
スーパー (ス)	ベンチなどの休憩所 (休)
スポーツクラブ (ク)	3~5 cmの小さな段差(段1)
在宅介護支援センターなど	5 cm以上の大きな段差(段2)
の老人福祉施設(老)	階段(階)
	スロープ(プ)

5. 所沢駅行きのバス停までの道のり調査

調査時刻を記入してください。 _____

Q5-1. 復路のみ：目的地から表1にあるような道路や障害物の種類について調査します。道路の両端からおよそ5メートル以内の範囲にあったものを記入してください。

写真係 → 表1の道路等の状況が分かるように写真を各2～3枚とってください。

地図係 → 写真を撮った位置に表1のカッコのアルファベットを記入してください。

地図係記入例：写真係が撮った放置自転車が多い道路沿いの場所

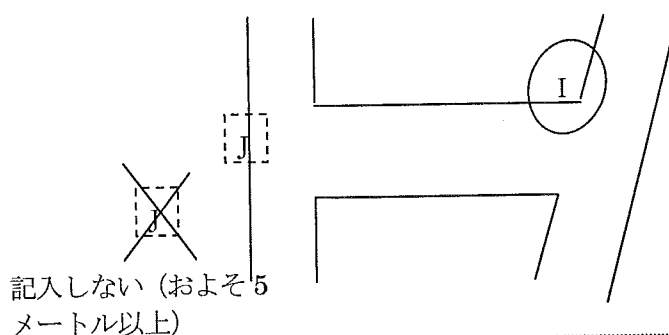


表 1 : 道路などの状況

信号のある交差点 (A)
交通量の多い大道路(B)
ガードレールありの歩道(C)
ガードレールなしの歩道(D)
緑道(E)
狭い道(F)
3~5 c m程度の小さな段差(G)
5 c m以上の大きな段差(H)
放置自転車(I)
歩行の障害となるたて看板(J)
舗装されていない道路(K)
段差(L)
スロープ(M)

以上で調査は終わりです。ご協力有難うございます。何か気がついたことがあれば、自由に書いてください。

厚生労働科学研究費補助金（政策科学推進研究事業）

「高齢が進んだ大都市近郊地域等における高齢者の社会参加促進方策と

その地域社会に与える効果に関する研究」

分担研究報告書

高齢者の生活支援のための最新技術活用の可能性

イタリアにおける都市近郊地域の高齢化と高齢者の生活実態

分担研究者 可部明克 早稲田大学人間科学部助教授

研究要旨

2015年頃に認知症の高齢者が250万人に増える日本では、グループホームなどを中心に介護サービスの向上を図っている。また、その予防や早期発見などには、地域やコミュニティの役割が期待されている。こうした状況に対応して、仕事中心のネットワークから切り離されて家族・地域から「浮いた」存在となっている「元サラリーマン高齢者」が、充実した生活を送りコミュニティ活動に参加するよう促すことは、長期的に介護予防の一助になると考えられる。

そのためには、運用面と技術面の両方からアプローチしたシステムにより、「多様で多層的なネットワーク」を構築して、コミュニティへの参加を促進することが極めて重要となってくる。

「運用面」では、高齢者の生活実態に合わせた支援策と、対応するコンテンツの明確化を行い、「技術面」では、支援策やコンテンツに合った、IT・移動用機器などの最新技術の活用を図る。

本研究では、「運用面」として高齢化のスピードが似る欧州各国、特にドイツ（16年度）およびイタリア（17年度）での実態調査を行った。その結果、大都市近郊で産業的要因などから特定地域で高齢者が多い地域があることが分かり、ドイツ・ドルトムント市、イタリア・ローマ市の事例を得ることができた。特にイタリア・ローマ市では、日本・所沢市および多摩市で実施した「都市近郊居住高齢者等に対するアンケート調査（以下「高齢者調査」という。）の質問票のイタリア語版を用意し、イタリアの聖アンナ高等研究院などの研究機関の協力を得て行った。

「技術面」では、コミュニティ側が高齢者の生活を見守る<ステージ1：見守り>、そしてコミュニティ参加に障害と感ずる段階などでハード的支援を行う<ステージ2：移動支援>、さらにはコミュニティに参加を促すきっかけを作り、コミュニティの中で楽しむためのソフト的支援を行う<ステージ3：ネットワーク・コンテンツ>の3段階に分けて、現状の技術の整理と活用可能性の検討を行った。

A 研究目的

「多様で多層的なネットワーク」を構築するために以下の視点から研究を行う。

運用面では、都市近郊に居住する元サラリーマンの高齢者は、多くの知識・経験を有する人々であり、引退後も地域において十分な活躍ができる能力を備えている人も多い。このため、引退後も働くことを生きがいとする傾向が見られる。一方、ドイツ・イタリアなど欧州各国ではできるだけ早く仕事から引退して、趣味などを中心とした生活を送る期間を長めにとる考えが主体となっている。

本研究は、都市近郊地域に居住する高齢者の生活実態を日本とイタリアなどで対比させ、「生活の楽しみ方」にどのような違いがあるかを明らかにしようとするものである。

技術面では、コミュニティ側や家族がIT技術を使って見守りを行うステージ1：見守り、コミュニティ参加のため外出しようとする際に障害とを感じる段階などでの移動をハード的にサポートするステージ2：移動支援、コミュニティに参加を促すきっかけを作り、コミュニティの中で楽しむためのソフト的支援を行うステージ3：ネットワーク・コンテンツの3段階に分けて、現状の技術の整理と活用可能性の検討を行う。

B. 研究方法

運用面では、イタリアでも有数の研究機関（国立の大学院大学）である聖アンナ高等研究院と打ち合せを行った結果、大都市近郊の

特定地域に、ある時期に労働者が多く入居し今は高齢者が多く居住している地域がローマ近郊にあることが分かり、日本の所沢市・多摩市で行った「高齢者調査」の質問票をイタリア語に翻訳して、ローマで聖アンナ高等研究院を中心に調査を行った。また、同研究院があるピサ県のピッチオーリ市でも、高齢者介護に関する技術的研究が行われているため、大都市以外の事例として調査を行った。

技術面では、日本国内で市場投入されている製品や、研究開発されている技術を、ステージ1：見守り、ステージ2：移動支援、に分けて紹介し、今後コミュニティに参加を促すきっかけとなり、楽しむコンテンツを提供するステージ3：ネットワーク・コンテンツでの技術活用を、上記の運用面の事例を参照しながら検討を行う。また、イタリア聖アンナ高等研究院で行われている介護福祉用機器の開発コンセプト、デンマーク介護施設でのアミューズメント機器利用なども参考にする。

C 研究結果

運用面では、日本とイタリアの違いが明らかになった事例として以下があげられる。

「誰に主に介護してほしいか」

	日本	イタリア
配偶者	50.7%	47.1%
同居中の子供	6.5%	9.8%
<u>別居中の子供</u>	<u>8.6%</u>	<u>20.4%</u>

「都心への外出頻度」

	日本	イタリア
<u>ほぼ毎日</u>	1. 4%	<u>38. 8%</u>
<u>週5日以上</u>	0. 8%	<u>4. 4%</u>
<u>1-3日/月</u>	32. 3%	10. 0%
<u>1日以下/月</u>	38. 2%	11. 6%

「外出の際の相手」

	日本	イタリア
(都心) <u>配偶者</u>	21. 8%	<u>41. 2%</u>
<u>一人で</u>	40. 8%	23. 5%
(近所) <u>配偶者</u>	20. 7%	<u>31. 9%</u>
<u>一人で</u>	68. 6%	35. 8%

「最近1ヶ月におこなった活動」

	日本	イタリア
<u>個人での趣味</u>	55. 2%	11. 6%
集団での趣味	31. 4%	17. 8%
<u>老人クラブ</u>	7. 9%	<u>27. 1%</u>

「携帯電話の使用状況」

	日本	イタリア
<u>週5日以上</u>	5. 4%	<u>29. 0%</u>
<u>週3-4日</u>	7. 4%	<u>18. 8%</u>
<u>持っていない</u>	66. 0%	15. 4%

技術面では、ステージ1ではネットワークを通じて見守りを行う家電や機器が既に市場投入されており、同様の目的で小型のサービスロボットなども試作品が投入されている。

ステージ2では人を乗せながら階段を移動する歩行ロボットなどの研究が企業や大学などの研究機関で行われている。

ステージ3ではコミュニティに参加を促すきっかけとなるようなメーリングリストや、Lモード上でのメール配信による「今日の街のイベント」、楽しむコンテンツを提供するTVゲームを活用した運動支援ソフト・機器や、癒し系の機器・空間などが挙げられる。

D. 考察

運用面では別居中の子供に介護して欲しい割合が日本8. 6%に対しイタリア20. 4%と高い。これは、イタリアでは60歳以上の80%の人が同じ市内に最低一人の親族が居住し、内40%は至近距離、半径1キロ以内に子供が居住しているのは高齢者夫婦のみ世帯で48%という、家族が近隣に住むという環境が寄与していると考えられる。日本は、辞令でどこでも赴任するという人事システムが主流であるが、それが多様で多層的なネットワークを地域に構築することを阻害する要因になり、親の近隣にいないため介護して欲しい対象者として割合が低いと考えられる。また、都心へ出かける頻度も、ほぼ毎日と週5日以上を合わせて、日本2. 2%に対してイタリア43. 2%と圧倒的に多く、一緒に行く相手も、日本では「一人で：40. 8%」に対してイタリアでは「配偶者：41. 2%」である。さらに、最近1ヶ月に行った活動として、日本では「個人の趣味：55. 2%」

に対しイタリアでは「老人クラブ27.1%」
と、グループで楽しむことが非常に多く、こ
うした暮らしに対する姿勢や工夫が、大きく
寄与していると考えられる。

これは、携帯電話の使用状況からも読み取れ
る。日本では「持っていない：66%」に対
しイタリアでは「週3日以上使用：47.8%」
であり、イタリア人が他の人と繋がっていた
い、という社会的欲求を示している。

技術面では、ステージ1ではネットワー
クを通じて見守りを行う機能を持つ家電や機
器は、日本でも欧州でも見られ、特に情報技
術やメカトロニクス技術を高齢者の体調など
のモニタリングに使うアプリケーションは、
試行段階だが裾野を広げつつあると見られる。

ステージ2での人を乗せながら階段を移動
する歩行ロボットは、企業や大学で研究され
ている段階だが、エレベータの設置が難しい
団地などでの利用には、まだ時間を要する。

ステージ3でのコミュニティに参加を促す
きっかけとなるような様々な情報配信のア
プリケーションは、ユーザインタフェースを

「タッチパネル式」など使いやすいものに
変更し、音声による簡単な指示だけで「今日
の街のイベント・皆の集まり・安売り情報」
などの情報が聞ける「ネットワーク型双方向
メディア」のようなツールに発展させ、楽し
むコンテンツとしては各種ゲームや運動支援
ソフト・機器、癒し系機器・空間等を統合し、
「楽しむ空間」として統合しソリューション

として提供する必要がある。

E 結論

現在、高齢者となっている日本の元サラリ
ーマンは、「辞令1本どこへでも」という人事
システムの基で、「多様で多層的なネットワ
ーク」を“社内”で構築したが、退社後に長
年住む“地域”では構築する機会がなかった。

このため、欧州、特にイタリアと比較する
と、会社での人間関係から切り離されて孤立
している現状が確認できた。働くことを生き
がいの中心に据えてきた日本人の特性を考慮
し、仕事の中で得たことを趣味レベルの地域
“知恵”サービスとして提供し、互いに楽し
むために助け合うことを主体とした“情報コ
ミュニティ”を今後の活動の中心とすること
がまず必要である。そのコミュニティ同士が
多様に多層に関係し発展するための、情報ネ
ットワークの活用と、コンテンツのソリュー
ション提供が重要である。そして、情報コミ
ュニティをITツール等でサポートしつつ、
実際に顔を合わせて話せる距離に構築してい
くことが重要である。

F. 研究発表

- | | |
|---------|----|
| 1. 論文発表 | なし |
| 2. 学会発表 | なし |

G. 知的所有権の取得状況

- | | |
|-----------|----|
| 1. 特許取得 | なし |
| 2. 実用新案登録 | なし |
| 3. その他 | なし |

第5章 高齢者の生活支援のための 最新技術活用の可能性

1. ITを中心とした現状の支援技術

仕事中心のネットワークから切り離され、家族・地域から「浮いた」存在になっている「元サラリーマン高齢者」には、コミュニティや家族が生活を見守るための技術活用<ステージ1：見守り>が、まず必要である。また、エレベータなどの設置が難しい団地からの外出を促すために、<ステージ2：移動支援>として階段のトランスファーを支援するロボットなどの研究開発なども行われている。

(1) 見守り技術・製品の事例

ア、みまもりほっとライン（象印マホービン）

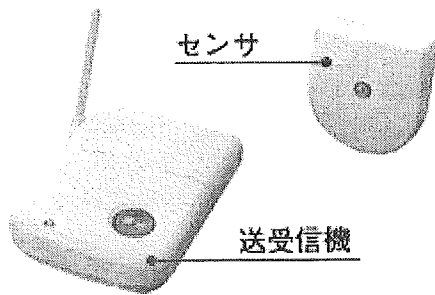
ひとり暮らしの高齢者の安否確認を目的としたサービス。無線通信機を内蔵した電気ポット「iポット」を高齢者が使うと、その情報がインターネットを通じて離れて暮らす家族に届く。家族は、iポットの使用状況を携帯電話やパソコンで1日2回、Eメールで確認できる。また、高齢者の様子が気になるときはいつでも最新の状況呼び出すことができる「メールリクエスト機能」も備えているほか、専用ホームページにアクセスすれば、1週間分の使用状況をグラフで確認することもできる。設置工事も必要なく、普段どおりにポットを使うだけなので、自然なかたちで高齢者を見守れる点が喜ばれている。「いつもつながっているような気がする」「かえってコミュニケーションがよくなった」など精神面での満足を表す声も多い。契約料は5,250円、月額料金は3150円。

経済産業省が情報家電の普及を目的に新設した表彰事業「ネット KADEN2005」において準大賞を授賞。ネットを意識させずに人と人とを繋ぐというコンセプトで高い評価を得た。[1]

イ、みまもりネット

（松下電工インフォメーションシステムズ、ナイスロケーションシステムズ）

家のリビングやトイレ、寝室などに熱線センサーを設置しておき、高齢者が部屋の中を動くときセンサーが感知して同社のデータセンターに情報を送る仕組み。各部屋の在室



図表—1 見守りシステム

状況をデータにして取り置き、指定の時刻にメールで伝える。高齢者が体調不良である場合など、部屋の移動回数が極端に減るのですぐにわかるという。80代の女性の家に取付けたケースで、一晚中廊下のセンサーが反応しており、電話にも出ないのですぐにかけたところ、転んで動けなくなった女性を発見し、すぐ病院に運んで大事には

至らなかったという報告もある。入会金は5,250円、月額料金は最新の様子を確認できるリクエスト機能がついたプランの場合で3990円など。[2]

(2) ロボットによる階段のトランスファー

早稲田大学ヒューマノイド研究所高西淳夫研究室とテムザックは、2005年4月28日に、階段昇降が可能な人間搭載型2足歩行ロボット「WL-16RII」を発表した。福岡市のロボット開発・実証実験特区において、人を乗せての階段昇降歩行に成功した。WL-16RIIの最大の特徴は、脚にパラレルリンク機構を採用していることで、これにより、通常の2足歩行ロボットが採用しているシリアルリンク機構に比べ、極めて大きなパワーを出すことができるほか、剛性や安定性も高いといったメリットを持つ。本体の質量62kgに加えて約94kgまでの積載能力がある。

この研究は「様々なロボットシステムの汎用移動モジュールとして実用に足る2足ロコモータ」の開発を目的としている。これは、下半身のみで自立歩行が可能な2足歩行ロボットを本研究により提供し、使用者がその要求に応じて上半身を架装するというもので、例えば、ユーザーがこのロボットに上半身のみの人間型ロボットを搭載すれば2足ヒューマノイドロボットが構成でき、その他のシステムを搭載すれば台車として利用可能、さらにこのロボットに人間が乗れば乗り物としても利用可能となる。現段階で最重要視している応用分野は福祉で、階段や斜面を昇降できる2足歩行型車椅子や、お年寄りがかまって歩くための歩行支援機などへの応用が検討されている。[3]

(3) その他の要素技術の活用

ア. ゲーム機器による運動促進



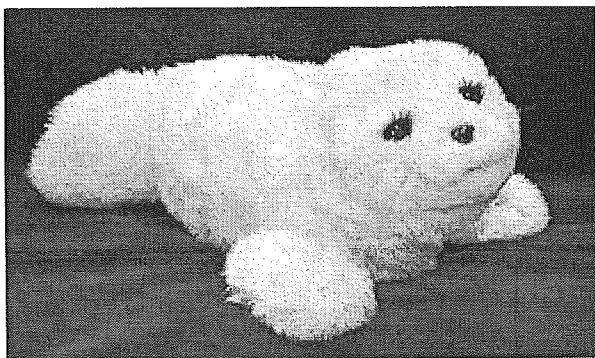
図表－2 運動促進に使用されているゲーム機器

デンマークのネストベズ市では、高齢者介護施設でゲーム機器を活用した運動促進プログラムの導入を試みている。(図表－2)

市内の数箇所にある高齢者介護センターで導入を試み、今後は「トレーニングセンターでのお試しプログラム」と「自宅のテレビに接続した

持ち帰りプログラム」の併用により、効果を上げる考えである。

イ. ロボットによる癒し



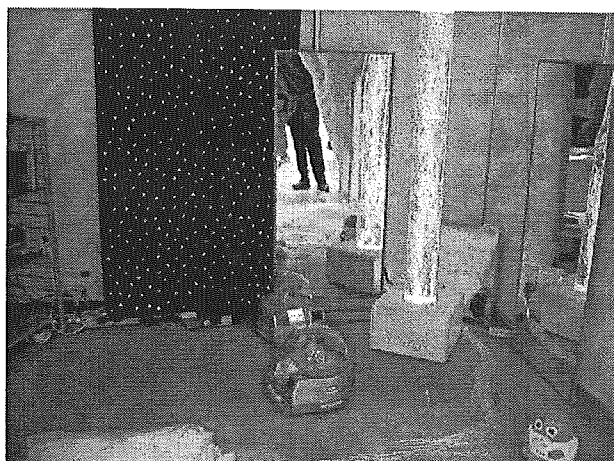
図表－3 アザラシ型ロボット パロ (PARO[パロ]ホームページより)

重視し、人との相互作用によって、人に楽しみや安らぎなどの精神的な働きかけを行うことを目的にしたロボットである。パロは、本物の動物を飼うことが困難な場所や人々のために、セラピーを目的に1993年から研究開発された。1台1台手作りのため、顔つきなどが異なるほか、学習機能により、新しい名前を学習したり、飼い主の好みに応じた行動を学習したりするため、個性を獲得する。デイサービスセンター、介護老人保健施設、特別養護老人ホーム、小児病棟、児童養護施設などで、数多く、長期間に渡

独立行政法人 産業技術総合研究所 知能システム研究部門とマイクロジェニックス株式会社が開発した、アザラシ型メンタルコミットロボット「パロ」(販売:株式会社 知能システム)(図表－3)は、人と共存するロボットで、かわいいや心地良いなど人からの主観的な評価を

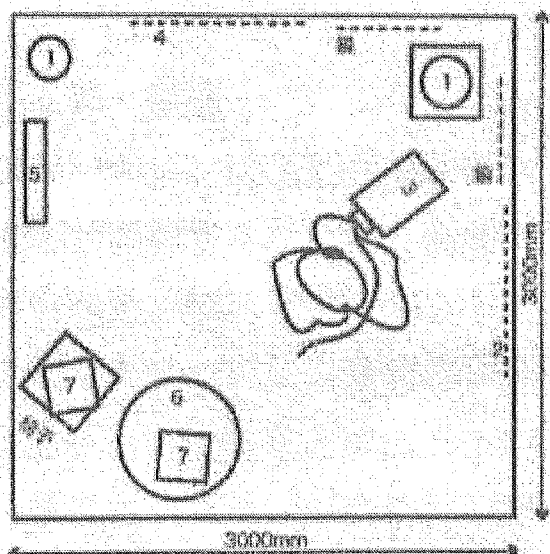
る実験を続けることにより、アニマル・セラピーと同じ効果を得られることを確認した。例えば、半年間以上、会話も笑顔も無かった子供を元気にしたり、尿検査によってホルモンの増減を調べることによりストレス低減などの結果を得た。同時に、介護者や看護師に関しても、バーンアウト評価（燃え尽き症候群）を行い、心労の低減を明らかにした。また、国内の様々な施設だけでなく、スウェーデン、イタリア、フランス、アメリカの高齢者向け施設や病院などで、パロによるロボット・セラピーの研究が行われ、数々の良好な効果が示されている。これらの実証実験の成果が認められ、2002年6月26日に世界一の癒しロボットとしてギネスブックに認定された。価格は1年保証で350,000円。[4]

ウ. スヌーズレンによる癒し



図表一4 スヌーズレンルーム

スヌーズレンは、重度の知的障害を持つ人々との関わりの理念としてオランダで誕生した。スヌーズレンデバイスを使用し、光・音楽・いろいろな素材の触覚・香りなどを工夫して提供し、個人のペースで感じ取りやすく、楽しみやすい刺激を備えた環境を作り出す。これを高齢者福祉に応用することで、認知症の予防や改善に役立てる。



図表一5 スヌーズレンルーム見取図

このスヌーズレンの概念を用いて、早稲田大学人間科学学術院可部明克研究室では、2005年12月に開催された2005国際ロボット展に、「ストレス社会に対応した生活空間刺激ロボット」研究として、スヌーズレンルームを出展した。(図表4・5) 全体のシステム構成としては、まず高齢者がPCに接続されたマイクに「おはよう」などのキーワードを発すると、それに従ってネットワーク接続されたロボットが、あ

らかじめ入力されたシナリオとして、赤外線を用いてスヌーズレンデバイスや CD プレイヤーなどを作動させ、スヌーズレン空間を提示する。今回の展示の時点で、ストレス対応デバイスとのネットワーク接続とシステム化、生体計測（唾液中の α アミラーゼ、 α 波、心拍数など）とデータ表示までが完了している[5]。今後は、個人に適した空間を構築するため、バイオフィードバックの基礎検討およびシステム構築を行い、より多くのデータを蓄積して研究を進める。また「スヌーズレンは長期的な（数ヶ月単位）使用により効果がある」との福祉関係者による経験的知見があり、それを実証するツールとして、データベース活用による「個人の長期トレンド」分析を行い、研究開発を進める。

本研究は、建築学、ロボット工学、医学などの各研究グループが融合した形で行われ、ASMeW（早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構）の中で活動しており、人間の周辺の環境制御、医学、ロボット工学が融合した新しい分野を切り開く可能性もある。